

# 村田喜代子『蕨野行』考

工藤 茂

一

〔此話はすべて遠野の人佐々木鏡石君より聞きたり〕と、柳田国男自らがその冒頭に書いてあるように、『遠野物語』は明治四十二年に時々柳田のもとを尋ねた佐々木鏡石こと佐々木喜善が語った話を、柳田が彼の文章にまとめたものである。その「一一一」は次のような内容になっている。

山口、飯豊、附馬牛の字荒川東禅寺及び火渡（ひわたり）、青世の字中沢並びに土淵村の字土淵に、ともにダンノハナと云ふ地名あり。その近傍に之と相対して必ず蓮台野と云ふ地あり。昔六十を超えたる老人はすべて此蓮台野へ追ひ遣るの習ありき。老人

は徒に死んで了ふこともならぬ故に、日中は里へ下り農作して口を糊（ぬら）したり。その為は今も山口土淵辺にては朝（あした）に野らに出づるをハカダチと云ひ、夕方野らより帰ることをハカアガリと云ふと云へり。

右の文章の後に（ダンノハナ）について、次のような注がつけられている。（ダンノハナは壇の塙なるべし。即ち丘の上に塚を築きたる場所ならん。境の神を祭る為の塚なりと信ず。蓮台野も此類なるべきこと「石神問答」<sup>（注）</sup>中に言へり）。

『物語』の文中にある（蓮台野）は「れんだいの」ではなく「でんでらの」と呼ばれている所で、『注釈 遠野物語』<sup>（注）</sup>に（蓮台野の字は柳田があてたものと思わ

れる」と注されている。柳田はハスのウテナ（仏の台座）の意を込めて蓮台の字を当てたのであろうか。

鈴木棠三編の「遠野物語拾遺」<sup>注3</sup>二六六には（青笹村の字糠前と字善応寺との境あたりをデンデラ野又はデンデエラ野と呼んで居る）とあり、次の伝承を記載している。

（前略）村中に死ぬ人がある時は、予め此家（十王堂の別当佐々木喜平家）にシルマシ（予兆）があると謂ふ。すなはち死ぬのが男ならば、デンデラ野を夜なかに馬を引いて山歌を歌つたり、又は馬の鳴輪のおとをさせて通る。女ならば平生歌つて居た歌を小声で吟じたり、啜泣きをしたり、或は高声に話をしたりなどして此処を通り過ぎ、聽て其声は戦争場（いくさば）の辺まで行つてやむ。又或女の死んだ時には臼を搗く音をさせたさうである。斯うして夜更けにデンデラ野を通つた人があると、喜平どんの家では、あゝ今度は何某が死ぬぞなど、言つて居るうちに、間も無く其人が死ぬのだと謂はれて居る。）

同書二六八には、さらに以下のような伝承が記録され

ている。

（昔は老人が六十になると、デンデラ野に棄てられたものだと言ふ。青笹村のデンデラ野は、上郷村、青笹村の全体と、土淵村の似田貝、足洗川、石田、土淵等の部落の老人達が追ひ放たれた処と伝へられ、方々の村のデンデラ野にも皆それぞれの範囲が決まつて居たやうである。土淵村字高室にもデンデラ野と呼ばれて居る処があるが、此処は、栃内、山崎、火石、和野、久手、角城、林崎、柏崎、水内、山口、田尻、大洞、丸古立などの諸部落から老人を棄てたところだと語り伝へて居る。）

柳田国男が昭和五年十二月に書いた序を持つ佐々木喜善の昔話集『聴耳草紙』<sup>序</sup>一三五「老人棄場」には、難題型の昔話が収められている。その語り出しは（昔六十になれば、デエデアラ野へやられたものだ）となつて居る。

以上に列挙した例によつても、『遠野物語』の（蓮台野）は「レンダイ野」ではなく、「デンデラ野」「デンデエラ野」あるいは「デエデアラ野」と呼ばれていたことが分かる。山本昌代の小説「デンデラ野」は、これによつ

て名づけられた表題であった。村田喜代子の『蕨野行』も、この伝承に触発されて生まれた小説である。彼女自身「新文章口座」（『朝日新聞』一九九年二月二一日）の中で、柳田国男の文章がその動機となつたと述べている。さらに「想・春の旗」（『朝日新聞』一九七年二月二四日）には「岩手の遠野に蓮台野（れんだいの）」という姥捨（うばすて）の丘がある。以前書いた小説「蕨野行（わらびのこう）」で取材に行つたのは五月、東北の遅い春に、丘はいちめん桃とタンポポとツクシで飾られていたと書かれてある。右の文中に「蓮台野（れんだいの）」という語が見えるのが『遠野物語』に取材したことを物語っている。新聞の文章には「れんだいの」のルビが付されている。田村は「女たちの野」（『朝日新聞』一九五年一〇月六日）にも「蕨野」の原形は柳田国男のやはり同種の著作に出てくるが、毎日、村へ仕事の手伝いに山から下りてくる老人たちの通いの姥捨をヒントにした。民俗学は面白いのだ」と書いている。

この蓮台野の地形を柳田は次のように述べている。  
（蓮台野の四方はすべて澤なり。東は即ちダンノハナ

との間の低地、南の方を星谷と云ふ。此所には蝦夷屋敷と云ふ四角に凹みたる所多く有り。）

## 二

田村喜代子の小説『蕨野行』は平成六年四月二十日、文藝春秋から刊行された。カバーの折り返しには次のような作者のことばが印刷されている。

行手に死の壁しかないこの姥捨の物語の導入部を  
思いめぐらせている時、ふと一人の若い女の顔がぼ  
うっと浮かんできた。つづいて一人の老婆の顔が現  
れた。そうだ、この二人の問い語りの中からなら、  
連綿とおこなわれてきた昔の共同体の悲話も、また  
一つの違つた趣きで現われるかもしれないと思つた。  
「行」の字には古く楽曲叙事詩の意があるという。嫁  
と姑の相聞・葬送歌のタイトルにふさわしく感じ、  
その一字を加えペンを起した。

この作者のことは後に文庫本に収められた時、その帯にも印刷された。『蕨野行』はまさにこのような小説である。

お姑（ババ）よい。

永えあいだ凍つていた空がようやく溶けて、日の光が射して参りたるよ。鋸伏山（ノコブセヤマ）を覆つていた雪も消え始め、山肌の残り雪がとうとう馬の形を現わせり。まだ尻尾のところは出ずなるが、この数日の日和りが続くなれば、すぐ馬の姿も出来上がりつろう。春が参るよい。

冒頭の部分である。馬庭家の嫁ヌイが姑のレンに語りかけるところからこの小説は始まる。ヌイのこの呼びかけにレンは次のように応ずる。

ヌイよい。

残り雪の馬が現れるなら、男ん衆の表仕事（オモテシゴト）の季節がきたるなり。田の打ち起こしが

始まりつろう。裏の庭にもコブシの花が咲いた。大きな花が五十も百も、真白に満開なるよ。田打ち桜と申して、昔からコブシは百姓に田打つ仕事せよと知らせるやち。男だちが田の用意をするあいだに、女子（オナゴ）等は大豆選り分けて良き種を取り置いたか。味噌大豆を煮るべしよい。味噌は一年中欠かせぬものなれば、これを種播（マ）きの前の仕事とするやち。

団右衛門はこの里の庄屋なれば、男仕事の頭領。したら嫁のおめは女仕事の頭（カシラ）やち。テラにもいろいろ尋ねて相談し、名子（ナゴ）、子作のかか等、下女だちを使うて、おれがしてみせたよにやるがよい。

この小説の一番の特色は右の対話の文体であろう。作者が（創作方言と名付けたが、方言よりむしろ古語なのだ）と言い、〈昔の文語調の非現実的セリフ〉と言（注）うこの文体が、読者の心を捉える。辺見庸が文庫本の解説に〈たぐいまれな音楽的文体〉と述べているのも、これ

によるものと思われる。

小説『蕨野行』は右のレンとヌイの対話によつて進行して行く。(舞台を江戸時代の凶作の年に設定した)<sup>(注6)</sup>と作者は述べているが、この小説の空間は「押伏」とされ、四、五年に一度寒冷の夏が来る厳しい土地に設定してある。レンは言う。

ヌイよい。

(略) いつも申すことなりが、鋸伏山の上に浮かぶ雲の形をば畏(オソ)れよ。春先に大きな傘雲が三日四日と続いてかかり、それが北の霧立山(キリタチャマ)の方角からほころびていき、破れ傘となるなれば、寒の夏を呼ぶ知らせやち。

破れ傘の現われる日は、風は湿つて重くなまぬるく、草木も動かず、鋸伏山の上を流れるのみ。空を敷切る二層有るよに滞るなり。したら、かねてよりの大根の種播く仕度をせろよい。恐しい夏がくる。その夏は昼も夜のように昏く、小石のごとくなる晝(ヒヨウ)が降りかかるやち。四、五年に一度のこ

の寒冷の夏は、免(マヌガ)れずなり。大根は寒に強く、ヒエも凶作の命をつなぐ糧(カテ)よい。

このように押伏(オシブセ)は厳しい土地なりて：私はここまで読んできて、太宰治の「津軽」を、宮沢賢治の「グスコープドリの伝記」や「雨ニモマケズ」の詩を、思い起こす。「津軽」には下記のような本文がある。

へ 元和一年	大凶
元和二年	大凶
寛永十七年	大凶
寛永十八年	大凶
寛永十九年	凶
明暦二年	凶
寛文六年	凶
寛文十一年	凶
延宝二年	凶 (以下省略)

津軽の人でなくても、この年表に接しては溜息をつかざるを得ないだろう。大阪夏の陣、豊臣氏滅亡の元和元

年より現在まで約三百年の間に、約六十回の凶作があつたのである。まず五年に一度ずつ凶作に見舞われているという勘定になるのである。

〔四、五年に一度のこの寒冷の夏〕というレンのセリフは、〔五年に一度ずつ凶作に見舞われている〕という「津軽」の表現と重なる。こうして『蕨野行』の「押伏」は日本の東北地方のどこかに置かれることになる。作中の「蕨野」は『遠野物語』の「蓮台野」のイメージによつて設定される。以上が『蕨野行』の文学空間の特色であろう。レンのセリフは里の庄屋馬庭の家の民間伝承である。〔大根は寒に強く、ヒエも凶作の命をつなぐ糧（力テ）よい〕というレンのセリフは如実にそれを示している。さて、このように厳しい押伏故にこの地には「秘事」がある。六十を越した年寄りにはワラビ衆にならねばならないことである。

ヌイよい。

春の土用の参りぬれば、ジジババ等は我が家を一時出て行くなり。皆共々に連れ立ちて、少々の着替

え、木椀、夜具など背負いて、三つの村を出奔せり。行く先は里より半里の、深代川（ジンダイガワ）の源流をたどるワラビ野の丘なるやち。

その丘に年寄りの小屋が設けて有る。そこに暮らすなるよい。ここには庄屋の古かかも子作の家のジジも、皆同じワラビ衆となりて別扱いは無え。ひとしく里の風を脱して、寝食を共にせん。

〔ワラビ衆〕とは家を出てワラビ野で暮らす老人のことである。レンはヌイに以下のように語り聞かせる。

ワラビ野には里の者は入つてはならない。ジジババ等の、里と境界を異にした場所だ。里の者が来ぬ代わりにジジババが毎日里に下る。村の仕事を手伝い、その日の飯の恵みを受ける。一日休めば、一日飢える。弱い年寄りには、ここでは命が保（も）たない。必ず死に尽きる。老人をふるいかけ、命強い年寄りは残し、弱い年寄りは早々に逝かせる。六十歳の関所だ。

凶作は数年に一度必ずやつてくる。その時、若者と子供の糧を、ジジババの命と代えて養うのだ。〔昔からの

押伏の智慧はこの法なり。されば他村に秘し、里の内の若え者等にも明かさずきたるやち。

ワラビには二つの掟がある。一つは名前を捨てること、もう一つは物言わぬこと。

冒頭に引用した『遠野物語』に（むかしは六十を超えたる老人はすべて此の蓮台野へ追ひ遣るの習ありき。老人は徒に死んで了ふこともならぬ故に、日中は里へ下り農作して口を糊したり）とある。作者はこれによりながら、ワラビ野には老人たちが里の掟に従つて自分から行くようにし、里での農作業は前に引用した作者のことばのように、この文章によつて設定している。ワラビの掟は、野に入った者が既に異界の者となり、里と世界を異にすることを明確にしたものと思われる。その意味において『蕨野行』は、日本文学における嫉捨の系譜につながる小説と言つていい。

### 三

レンはヌイに送られてワラビ野入りする。九人のワラ

ビ衆であつた。ワラビの小屋は草に埋もれて建っている。屋根はワラを葺かず板切れを張り、風に備えて大小の石を置く。板のままなのはワラの葺き替えの手間を惜しむためか、ワラビに冬越えのための暖を惜しむゆえか、板切れは剥ぎ飛んで穴が開いていた。ジジ三人が一戸を取り、ババ六人が別の二戸を取つて棲家とする。こうしてワラビ野の生活が始まる。

川の水を汲んで帰る朝、レンは白骨を見る。（これは去年のワラビ衆の内の、誰かの亡骸（ナキガラ）で有りつろう。六十の関所を抜けることを果たせず、不運の内に仏となりたるか。ゾツとして足もこわばつたが、もしや明日の我が身の姿とも思い、おれは桶をおろし手を合わせた）。

これは小説の最後を暗示する場面である。だがワラビ衆は、それまでの最後の生を凄じくもいきいきと生き延びるのである。その生の様相を作者は姑レンに語らせ、押伏の生活の姿を嫁のヌイに語らせる。ヌイの話の中に貧しい押伏の貧しい家に嫁に来た十六歳のハルの話が出る。あまりにも過酷な労働と生活に耐えられず実家に帰

ろうとした彼女は、父親に追い返されて行方不明になる。里の者たちが総出でさがしたが、遂に見つからなかつた。それを聞いたレンは、同じような娘に自分の妹のシカがいたことを語り、ハルは死なないだろうと言う。シカは産み月近くになって、貧しい家に新しい子はいらぬと婚家を追い出されて行方不明になった。そのシカに蕨取りの山中で出会つたのは十年後のことであつた。

目をキラキラ光らせながら、ツバナの女（ツバナの穂のごとき白髪の女）は黙っておれを見下ろしている。手を出しかけて、ふつとその手を縮める。その様子が悪さなすようには見えすよ。人のごとくなる驚のごとくなる不思議な目の玉が、じつとおれをうち眺め、その唇が動いた。

「姉や」

と声が出た。

このシカは後にワラビ衆になつたレンの前に再び姿を現し、峠を四つ越えた所にある自分の棲み家にレンを誘

う。レンが断ると、

「山の者となりたるおれとは、いっしよに暮らせずか」と責めるが、結局はあきらめて山を指さし、

「この夏よりは山にも変わったことが起りたる。里の女子の姿が一人、二人と入つて参つたるなり。田畑は例年に無え荒れ年にして、おおかた婚家を出されたるおれのような身の上の女子等が、世を捨てて入山して参るつるか。一人で入る女子も有り、二人、三人仲間連れにてくる女子も有り、中には乳飲兒を抱きて入る女子の姿も見たるなり。皆山深く潜りて行方は見失いたるが、それでも棲み着いた様子にて、ときどき谷川に人の声の響きて有るよ」と語る。

この妹シカの造形の源流も『遠野物語』であろう。

山口村の吉兵衛と云ふ家の主人、根子立（ねつこだち）と云ふ山に入り、笹を蒔りて束となし擔ぎて立上らんとする時、笹原の上を風の吹き渡るに心付きて見れば、奥の方なる林の中より若き女の穉兒を負ひたるが笹原の上を歩みて此方へ歩みて来るなり。



(四)

遠野郷にては豪農のことを今でも長者と云ふ。青笹村大字糠前の長者の娘、ふと物に取り隠されて年久しくなりしに、同じ村の何某と云ふ獵師、或日山に入りて一人の女に遭ふ。怖ろしくなりて之を撃たんとせしに、何をぢでは無いか、ぶつなと云ふ。驚きてよく見れば彼の長者がまな娘なり。(後略)(六)

上郷村の民家の娘、栗を拾ひに山に入りたるまゝ歸り来らず。家の者は死したるならんと思ひ、女のしたる枕を形代(かたしろ)として葬式を執行ひ、さて二三年を過ぎたり。然るに其村の者獵をして五葉山(ごえふざん)の腰のあたりに入りしに、大なる岩の蔽ひかゝりて岩窟のやうになれる所にて、因らず此女に逢ひたり。(後略)(七)

『遠野物語』の中から山中で女に出合つた話を抜粋した。特に後二者は、突然姿を消した女が山中にいたとい

う話で、その中でも(六)の内容は『蕨野行』のそれに近い話である。しかし、その文体はまるで違い、レンの語りはその情景をヴィヴィットに描いている。

#### 四

「レンや。一つ真実をおめに教えてやろう」とトメは言うた。

「五日のあいだ飯を断ちて、判明せることが有る。細々と食いつなげば飢えはどこまでも止まじよ。思ひ切りてスツバリと断ちたれば、ひもじさも不思議に切れて有るなり」

そうして、顔面さざ波を寄せるよに皺をつくりて笑(エ)みを浮かべ、

「おれの今の安らいだ心地がわかるか」とつぶやく。

「抜け落ちたるごとく、飢えより逃れたる。思えば永えあいだの飢えで有りつる。物心ついたときより背負うてきたるその飢えを、ようやく今は立ち切り

たるか。おお、よき心地せるよ」

いかにも満足そうなる長え息を吐いた。

ワラビ衆のひとりトメはこのようにして逝った。彼女の亡骸は骨と皮だけになり、日に干し上げたようにカラカラであった。しかし、そこには嘆きも苦も無かった。他のワラビ衆はあいかわらず里に下つては飯にありつき、ワラビ野での生活を送つて行く。

レンは言う。

「人がワラビとなるには、まず姿かたちから移ろっていく。髪はザンバラにうちかかり、着物は破れ、身の瘦せていくのがまずワラビの始めなり。したが心地はまだ里の気分を引きずり、人の心地の続きで有るよい。されば一ト月……二ヶ月……五ヶ月……と野に暮らす日を重ねて参ると、人間の気分すこしずつ薄れゆくなり。」

この頃ワラビ衆のひとり馬吉は、六十を越した男なのに、レンたちババのそばから離れず、年の若い者のようにふるまう。馬吉の心はレンに傾いていく。ある日馬吉は二羽の山鳥を持つて来る。

「これを焼いて、みなで分けつろう。先に見せればマツなどが独り占めせんと騒ぐなり。まず切り分けて焼くべし」と馬吉はレンに差し出す。二羽の肉はジジババの二日分の食糧になる。ワラを焼いてその粉を食つていた者にとつてはたいそうな馳走である。

その後で馬吉は言う。

「おめがために、まことは獲りてきたる」「レンよい。おめがためやち」

髻に覆われた馬吉の顔が、レンを笑つてみている。その髻面の皺の中に、ジジの面貌の内にレンは遠い昔の男の頃の名残りが、ぼうと覗き見えていると思う。

馬吉は生命力が強く、最後まで生き延びるワラビ衆である。始めからレンが好きであつたが、この世ではレンを彼女の夫に取られたので、あの世で一緒になろうと考へている男として設定されている。ワラビ野の生活には、このような男女の愛情も描かれ、それがこの小説にリアリティーを与えている。

ヌイのお姑への語りは里の様子を伝える。押伏は長雨が続き凶作の兆候を示している。貧しい家では普段も

「口減らし」や「間引き」が行なわれているのに、凶作になればなお一層この問題が起こつて来る。

「里に在りても今年は口減らしとて、足入れの若え嫁等が子を孕み、家を出される話多くなるやち。嫁一人の口を養う飯も惜しきところに、赤子が増えなば一大事と、急ぎ離縁せるなるよ」

ところが、あろうことかそのヌイが妊娠したのである。夫団右衛門は生めと言うが、ヌイは悩む。〈凶作は二年続くこと多し。三年四年越しも珍しからず。団右衛門にとりては初子なるも、赤子を逝かした家の者には、生まれた馬庭の子はさぞ憎からんか。たださえ今年などは庄屋、地頭等は恨まれぬ。倉の五穀すべて投げ出すとも、恨まれて有りつるよ。豊かな家は羨まれぬ。そのよな里の者の恨みの中で赤子を生むべしか〉と。

その夜ヌイは二人の小児が部屋に入つて来る夢を見た。まだ一歳にも満たない様子で、よだれかけなどしていた。一人は男児で顔色が青く亡児のように見える。もう一人は女児で明らかに生きていた子であった。二人は遠い所を旅して来たように小さい足にワラ草履を履いていた。

亡児が、

「おめがヌイか」と問う。黙つてうなずくと、二人はヌイの前に座つた。亡児は夫の先妻の子で産の途中母と共に亡くなつた長太郎だといふ。女児は今ヌイの腹にいる子だといふ。何しに来たのかと問うと、

「おれだちは、このたび宿縁によりて、おめの子として生まれることになつたやち。なれば、こうして、おめに物申しに参りたるよ。おめはおれだちを生むべし」と言う。

「おめ等は幼きゆえ、わからずなり。今年、来年、子をつくるは難しかるよい」

と言へば、亡児は恐ろしい形相で目を吊り上げた。「それは人の世のことなり。おれだちは知らず。生まれるには順番が有るゆえ、おめはこのたびの初子を生めやち」

「何の順番か」  
と尋ねると、亡児はとくとくとしゃべりだした。かたわらの女児を見て、

「まず、こいつが先に団右衛門とおめ等の娘として生まれるなり。次におれが馬庭の跡取りとして生まれ直すなりよ。姉弟の順が決まりて有れば、こいつを先に生むなるべし。こいつを流せば、また次にこいつが出てくる。さればおれは遂にこの世に出る時を失なうなり。そしておめらも長子を得ずとなりか」と亡児は奇妙なことを話せるよい。

「くれぐれも申すに、こいつを生むなるべし」

それに合わせて、女児が回らぬ舌で、

「生むべし、生むべし」

と、にらむよに和唱してうなずける。

「ヌイよい」

と、女児の声はそのとき老婆のよな響きがした。

「さればのちの日に会いまみえんか」

そう言うて、子等は立ち上がらる。そのままきびすを返し、開けた戸からスーッと闇の中へ消えて行った。

この亡児長太郎はワラビ野で余命いくばくもないレン

の夢にも現われる。レンは長太郎に導かれてヌイの所に行く。〈女児の声はそのとき老婆のよな響きがした〉とヌイが聞いたのは、それがレンだったからである。長太郎に言われてレンは、自分が生まれ変わってヌイのおなかの子になるのだと思う。

〈今世にては武右衛門の嫁としてこの屋敷の者となり、来世にては団右衛門、ヌイ等の子としてまた馬庭の一類となりぬるか。長太郎の言うことを信じるならば、おれはよくよくこの屋敷と深い縁を受けて有りつるかとおもうなりよ。さればヌイがおれを慕い、おれがヌイを恋うことも、来世は親子となる宿縁のゆえか。不思議とも奇妙ともおもいたる。〉

私たちはここまで読んできて、姑レンと嫁ヌイの奇妙な愛情のからくりを知らされるのである。

作者はワラビ野で亡くなったレンの次のような語りで『蕨野行』を締め括る。

一人になると、おれは早足に里へむかつて歩き出した。林を出て通い慣れた原の道を行き、やがて田

の見える所まで来た。冬田は雪をかぶり眠りてあつたやち。その先に里の家の屋根が一つ、二つと現われて参りつる。

どこかで鶏の鳴く声が流れていた。エサを貰う牛の声も遠く聞こえつる。人の世の、里の朝の響きなり。おれは雪の積んだ白い田の道をまつすく、馬庭の屋敷をめざして歩いて参りたるよい。

さて、ヌイの腹へ入りぬるか、とおれはつぶやいた。そしてあの女子の乳を飲もうと渴くようにおもつた。

ヌイよ、ヌイよ、とおれは今はまだ、母となる者の乳を恋うて夢のように、一心に、歩いた。

## 五

村田喜代子は「女たちの『野』」（『朝日新聞』平成七年一〇月六日夕刊）において（民俗学は面白いのだ）と書いているが、小説『蕨野行』は民俗学がそのまま小説になったような作品である。柳田国男の『遠野物語』に

触発されて創作されたことばかりではない。姥捨、山の女の他に、農村の嫁、庄屋の生活、生まれ変わりのモチーフ等、全てが見事に生かされている。そればかりではない。細部がよく生きていてそれが何とも言えないリアリティーを作品に与えている。

かつて阿部正路氏が『日本近代民俗文学論』において、日本の近代文学に民俗文学の領域の成立することを実証されたが、村田喜代子の『蕨野行』はその領域の代表的な文学と言つていいかと考える。

ところでこの作品において描き出されたものは何であろう。それはおおかた忘れ去られようとしている日本人の心意現象であった。かつて柳田国男が試みたものと同じテーマである。それを小説において探つたものが『蕨野行』であった。そういった意味においてこの小説は同じ作家の作品『龍秘御天歌』と対をなすものであるろう。

さて日本文学を縦に流れている「娘捨」のモチーフという観点からこれを検討してみると、ずいぶん異質である。ワラビ衆となつて老人共同体を形成し、命を維持して行くことがその原因とならう。その根源は『遠野物語』

にあるのであるから、『遠野物語』の伝承そのものが他の姨捨話の型と異質だとも言える。ただ、六十になつた老人はワラビ野へ行く決まりが里にあるのだから、やはりそれは一種の親棄てであり「姨捨」の系譜に組み込まれて不都合はない小説だと言える。

6 「8月の随想―遠いノック」(「大分合同新聞」平成八年八月一九日)

(本学教授)

(注)

1 柳田国男の著作。『遠野物語』『後狩詞記』と共に、日本民俗学の草創を意味する記念碑的著作といわれる。

2 後藤総一郎監修・遠野常民大学編著、九七年八月二日筑摩書房刊

3 柳田国男『遠野物語』(昭和三〇年一〇月五日刊・角川文庫)所収の「拾遺」

4 九三年六月二四日刊・ちくま文庫

5 「想―紅生姜と蕨野行」(「朝日新聞」九七年六月一七日)